

『古今和歌六帖』 出典未詳歌注积稿

—— 第六帖 (19) 雁〜時鳥 ——

福田 智子

本稿は、『古今和歌六帖』出典未詳歌注积稿―第六帖(9) 芹〜青葛―(『社会科学』第四十三卷第四号〈通卷一〇一号〉、二〇一四年二月)、『古今和歌六帖』出典未詳歌注积稿―第六帖(10) 朝顔〜葵―(『社会科学』第四十四卷第四号〈通卷一〇五号〉、二〇一五年二月)、『古今和歌六帖』出典未詳歌注积稿―第六帖(11) 酢漿草〜苔―(『社会科学』第四十五卷第一・二号〈通卷一〇六号〉、二〇一五年八月)、『古今和歌六帖』出典未詳歌注积稿―第六帖(12) 蟬〜鈴虫―(『文化情報学』第十一卷第一号〈通卷一四号〉、二〇一五年一月)、『古今和歌六帖』出典未詳歌注积稿―第六帖(13) 螢〜蝶―(『社会科学』第四十七卷第一号〈通卷一二三号〉、『古今和歌六帖』出典未詳歌注积稿―第六帖(14) 木〜紅葉―(『文化情報学』第十二卷第二号〈通卷一七号〉、二〇一七年三月)、『古今和歌六帖』出典未詳歌注积稿―第六帖(15) 檀〜紅梅―(『社会科学』第四十七卷第二号〈通卷一一四号〉、二〇一七年九月)、『古今和歌六帖』出典未詳歌注积稿―第六帖(16) 柳〜橘―(『文化情報学』第十三卷第一、二号合併号〈通卷一八号〉、二〇一八年三月)、『古今和歌六帖』出典未詳歌注积稿―第六帖(17) 椎〜山萮菑―(『社会科学』第四十八卷第二号〈通卷一一八号〉、二〇一八年八月)、『古今和歌六帖』出典未詳歌注积稿―第六帖(18) 鳥〜鶴―(『社会科学』

学』第四十八卷第四号〈通卷一二〇号〉、二〇一九年二月)の続編として、『古今和歌六帖』第六帖の「雁」から「時鳥」までの題に配されている出典未詳歌、十首について注釈を施し、表現のあり方を考察したものである。これまで同様、底本には書陵部蔵桂宮本(『新編国歌大観』の底本)を用い、江戸期の流布本である寛文九年(一六六九)版本を含めた九本の伝本の本文異同を視野に入れる。凡例は、『社会科学』第四十三卷第四号に詳述しているので、その概略を記すにとどめる。なお、巻末には、別出一覧を示す。雁〜時鳥題の歌(四三五〜四四五三番)を対象とする。これについての凡例も、前稿を参照されたい。

凡例

- 一、底本は、宮内庁書陵部蔵桂宮本を用いる。
- 二、校異は、漢字・仮名の表記の違いや仮名遣いの相違は原則として示さず、語の異なりのみを示すが、和歌の解釈上、重要と思われる表記の異同は、必要に応じて適宜示す。諸本と

その略称は次のとおり。

- 永青文庫蔵北岡文庫本 略称(永)
  - 島原図書館蔵肥前嶋原松平文庫本 略称(松)
  - 内閣文庫蔵和学講談所旧蔵本 略称(和)
  - 内閣文庫蔵林羅山旧蔵本 略称(羅)
  - 神宮文庫蔵林崎文庫旧蔵本 略称(林)
  - 神宮文庫蔵宮崎文庫旧蔵本 略称(宮)
  - 田林義信氏旧蔵本 略称(田)
  - ノートルダム清心女子大学図書館蔵黒川本 略称(黒)
  - 寛文九年版本 略称(寛)
- 三、和歌の引用は、とくに断らない限り、『新編国歌大観』に拠る。

注釈

四三五七(かり)

【本文】

あやしくもきなかぬかりかしら露のおきにしあさを<sup>(ほ)</sup>ひさし<sup>(物)</sup>きものを

【校異】○あさほ―あさを(松・和・羅・林・田) あさを<sup>(宮)</sup>

秋は(黒・寛)

【語釈】○あやしくも「あやし」は、普通でない物事に対して、

その原因、理由がはっきりとつかめないときの奇異な感じをいう。いぶかしい。変だ。「も」は詠嘆的強調。○きなかぬ「来

鳴く」は、鳥が来て鳴く意。○あさを 底本「あさほ」を他の写本系本文により校訂した(【考察】参照)。麻苧。クワ科の

一年草で、夏に収穫し、茎を干して皮から繊維をとり、布や糸にする。○ひさしきものを「久し」は、時が長く経っている

意。  
【通釈】いぶかしいことに、やって来て鳴かない雁だよ。白露が置いた麻苧は、時が長く経っているのに。

【他出】『続後拾遺和歌集』巻第四秋歌上、三〇六番

題しらず

人麿

あやしくもきなかぬ雁かもしら露のおきし浅茅生色付きにけり

【考察】

夏に刈り取って干した麻苧の上に、白露が置いて秋を迎えたというのに、渡って来る雁の声が聞こえないのはなぜだろうか、と不審に思う歌と解した。身近な景物に夏から秋への季節の移り変わりを感じた歌であろう。

「あやしくも」という句は、『万葉集』では、短歌形式の場合、第三句に置かれる。「恠」(巻七・一三一八・一三二四)(巻

十一・二四〇六・二四〇二)、「恠毛」(巻七・一三七五・一三七二)、「安夜思苦毛」(巻十八・四〇九九・四〇七五)という例がある他、西本願寺本の訓では、「奇母」(巻三・二四六・二四五)が挙げられる。勅撰集初出は『後撰集』で、『万葉集』と同じ第三句の例も、「ぬきとめぬかみのすぢもてあやしくもへにける年のかずをしるかな」(後撰集・雑三・二二〇九・伊勢・かしらしるかりける女を見て)という歌があるが、当該歌のように初句に位置する例も、「あやしくもいとふにはゆる心かないかにしてかは思ひやむべき」(後撰集・恋二・六〇八・よみ人しらず・ふみつかはせども返事もせざりける女のもとにつかはしける)がある。他にも、十世紀後半には、「あやしくもしかのたちどの見えぬかなをぐらの山に我やきぬらん」(拾遺集・夏・二二八・平兼盛・九条右大臣家の賀の屏風に)、「あやしくもわがぬれぎぬをきたるかなみかさのやまを人かられて」(義孝集・一八・左衛門督の命婦のもとに、権中将となりのて、宮のおはしたりとききてやる)、「あやしくもよるのゆくへをしらぬかなけふひぐらしのこゑはきけども」(蜻蛉日記・上・八三・作者)、「あやしくもぬれまさるかなかすが野のみかさの山はさしてゆけども」(宇津保物語・藤はらの君・三二・かの右大将殿〈兼雅〉)などが、初句の例として見出されるが、『古今六帖』には当該歌以外見当たらない。

雁が「きなく(来鳴く)」という歌は、『万葉集』に集中して見られる。「妹があたり繁き雁がね夕霧に来鳴きて過ぎぬすべなきまでに」(巻九・一七〇六・一七〇二)、「雁がねの来鳴かむ日まで見つつあらむこの萩原に雨な降りそね」(巻十・二一〇一・二〇九七)、「雁がねは今来鳴きぬ我が待ちし黄葉はや継げ待たば苦しも」(巻十・二二八七・二二八三)、「雁がねの来鳴きしなへに韓衣龍田の山はもみちそめたり」(巻十・二一九八・二一九四)、「今朝の朝明秋風寒し遠つ人雁が来鳴かむ時近みかも」(巻十七・三九六九・三九四七)といった用例があり、長歌にも、「……九月のしぐれの降れば雁がねもいまだ来鳴かぬ……」(巻十三・三三三七・三三二三)という用例がある。なお、『万葉集』二二八七番は、『人丸集』一二五番にも載る。

秋の「露」を「雁」の涙と詠むのは、「なきわたるかりの涙やおちつらむ物思ふやどの萩のうへのつゆ」(古今集・秋上・二二一・よみ人しらず・題しらず)であるが、秋になり、渡つて来る雁と露が置くのと紅葉の時期が重なることから、「雁が音の寒き朝明の露ならし春日の山をもみたすものは」(万葉集・巻十・二一八五・二一八一)という歌が詠まれる他、勅撰集においても、「いとはやもなきぬるかりか白露のいろどる木木ももみぢあへなくに」(古今集・秋上・二〇九・よみ人しらず・題しらず)

ず)、「秋の夜のつゆをばつゆとおきながらかりの涙やのべをそむらむ」(古今集・秋下・二五八・壬生忠岑・これさだのみこの家の歌合によめる)、「雁なきて寒き朝の露ならし竜田の山をもみだす物は」(後撰集・秋下・三七七・題しらず・よみ人しらず)という歌が見える(このうち『後撰集』の歌は、先の万葉歌の異伝と見られる)。とりわけ『古今集』二〇九番歌は、早くも雁が鳴いたことを詠んでいるが、当該歌は未だ鳴き声が聞かれないという点で好対照をなす。また、秋の露が置く頃には雁が鳴くという歌も、「しらつゆのきき(つゆ)にしほどの秋はなほとこよのかりもなきてとひけり」(村上天皇御集・八)がある。

「あさを」(麻苧)の語の用例としては、つとに『万葉集』に、「麻苧らををけにふすさに續ま<sup>ず</sup>とも明日着せさめやいざせ小床に」(巻十四・三五〇四・三四八四) (巻九・一八〇四・一八〇〇)があるが、和歌の用例数は稀少である。平安中期には、わずかに「わがまきしあさをのたねをけふみればちえにわかれて影ぞすずしき」(好忠集・一三六・五月中)を見出すのみであり、かつ、当該箇所には『好忠集』諸本により異同があった。本文としては不安定である。その後も、「たつひよりしづのあさをもひたすめりむすぶいづみのみづのながれに」(為忠家初度百首・二八八・泉辺初秋)、「たこのきるあさをのころもぬれながらほすひまもなきさみだれのそら」(肥後集・六七・さみだ

れ)といった例がかるうじて指摘される程度である。

一方、底本「あさほ」を、「さ」と「き」の誤写と見て「あきほ」と校訂した場合、『新編国歌大観』を検すると、わずか一例ながら、「いつのまに秋穂たるらむ草と見しほどいくかともへだたらなくに」(寛平御時后宮歌合・九一・右、新撰万葉集・巻之下・三三七・秋歌二十七首・下句「程幾裳ホドイバクモ 未歴無国イマダヘナクニ」)という「秋穂」(秋の実った稲穂)の用例が見出される。露が稲に置くという例も、「しらつゆのおくてのいねもかりてけりあきはてがたになりやしぬらん」(頼基集・四・寛平の御ときの屏風の歌)、「しら露のおくてのいねもいでにけりかりくるかぜはむべもふきけり」(重之集・二七四・秋廿)といった歌がある。とくに『重之集』の例は、稲に露が置いた情景と来る雁とを結び付ける秋の季節感が、当該歌と共通することになる。

だが、本稿では、このような表現類型をもつ「秋穂」本文よりも、日常生活における粗末な衣の素材で、和歌の用例数もごく少数の「麻苧」本文のほうが、むしろ本来的ではないかと考えた。後考を俟つ。なお、「他出」として挙げた『続後拾遺集』所収の人麿歌の「浅茅(生)も、(白)露」との組み合わせの例は多く、やはり表現類型に引かれた異伝と見るべきであろう。

四三六二（かり）

【本文】

かりがねのたかく名のりしみなれども秋のこゑとぞ人はいひてし

【校異】なし

【語釈】○かりがね 雁の鳴く声。 ○たかく名のりし 「たかく名のる」は、雁が甲高く鳴き声をたてる意に、高い名声を得る（立派だ、優れているといった世間的評価を得る）意を重ねる。「し」は過去の助動詞「き」の連体形。 ○秋のこゑ 秋という季節に自然がもたらす、ものさびしい情趣を感じさせる物音・気配。漢詩文由来の語。「触石秋声如説誦」（和紀処士題新泉之二絶詩『菅家後集』）。「考察」参照。 ○人はいひてし 「人」は世間の人。「て」は完了の助動詞「つ」の連用形。「し」は過去の助動詞「き」の連体形で、係助詞「ぞ」の結び。

【通釈】雁の甲高く鳴く声のように、高い名声を得ていた我が身であるけれども、それは秋のものさびしい物音だと、世間の人には確かに言ったことだよ。

【他出】なし

【考察】

かつての自分の名声も、世間では、雁の声と同じように、秋の気配を感じさせるものさびしい物音ほどのものでしかない、

という人生のさびしさを詠んだ歌であろう。

「かり」が「なのる」例は、『新編国歌大観』を検するかぎり、当該歌以前の歌は見当たらないが、院政期から平安末期にかけて散見される。「雲がくれ名のりをしつゆく雁の名残念しき秋の空かな」（堀河百首・六九七・師時・秋廿首）の他、『為忠家初度百首』に、「なのりしてふるさとへ行くかりがねをなとかとどめぬすまのせきもり」（八九・盛忠・関路帰雁）、「あしがらのせきをもしらずねたげにもなのりちらしてかへるかりがね」（九〇・頼政・関路帰雁）、「いそぎつつこまうちむるたそかれに雲るばかりになのるかりがね」（三五二・為盛・羈旅雁）の三首の歌が見え、また、「ゆふやみにはねうちかはしとぶかりものればそらにかずぞしらるる」（教長集・三八〇・秋／雁行知声）、「さもこそはたそかれどきといひながらおのがおののるかりがね」（有房集・一四七・ゆふぐれのかりのこゑ）、「たまづさのうらひきかへすこちして雲のあなたになのるかりがね」（長明集・二九・雁声遠聞）、「かへるさになのるばかりをなさけにてたのむの雁も遠ざかるなり」（御室五十首・一一・御詠〈守覚法親王・春十二首〉）といった例が挙げられる。

「高く名のる」という表現の類例には、「朝倉やとはぬになのるほととぎす木の丸どのの名をたかしとや」（久安百首・六二五・尾張守親隆朝臣・夏十首）、「五月雨のふるの神杉すぎがてにこ

だかくなのる郭公かな」(拾遺愚草・下・二二二・建仁二年三月、六首めされし、夏歌)、「しのびねはひきのやつなる時鳥くもゐにたかくいつかなのらん」(十六夜日記・一〇一・作者)などがあるが、いずれも時鳥を詠んだ後世の例である。

「秋のこゑ」という語句は、「語釈」でも触れたように、漢詩由来と見られる。『和漢朗詠集』には、「潯陽江色潮添滿 彭蠡秋声雁引來」(上・三一八・劉禹錫・雁付帰雁)、「煙葉蒙籠侵夜色 風枝蕭颯欲秋声」(下・四三〇・白・竹)、「陰森古柳疎槐 春無春色 獲落危牖壞宇 秋有秋声」(下・五三〇・連昌宮賦・故宮付破宅)、「紅榮黃落 一樹之春色秋声 結綬抽簪 一身之壯心老思」(下・七二六・菅三品・老人)の四例が見いだされる。和歌では当該歌がごく初期の用例と見られる。勅撰集においては、「まぶしさすしづをのみにもたへかねてはとふく秋のこゑたてつなり」(千載集・恋四・八四八・藤原仲実朝臣・堀河院御時、百首歌たてまつりける時、恋のこゑをよめる)が初出であり、八代集中には、他に、「いすず河そらやまだきに秋のこゑしたついはねの松のゆふかぜ」(新古今集・神祇・一八八五・大中臣明親・社頭納涼といふことを)を見出すのみである。

四三八二(かり)

【本文】

月見ればわかれてぞ人のこひしきにいとど雲(と)みに鳴(な)きわたるかり  
 【校異】○われてそ人の―われても人の(林)われてそ人の(宮)  
 われても人の(黒・寛) ○鳴わたるかり―鳴わたる也(寛) ※  
 永青文庫本の本文は片仮名小書き。

【語釈】○われてぞ人のこひしきに「われて」は、「思い余つて」の意。係助詞「ぞ」は形容詞「こひ(恋)し」の連体形「こひしき」で結ぶ。「の」は主格。「に」は逆接。○いとど ますます。「鳴きわたる」に掛かる。○雲 雲のある所。大空。【通釈】月を見ると、思い余つてあの人を恋しいのに、ますます大空を(恋しさをかき立てるように) 鳴いて渡る雁だよ。

【他出】なし

【考察】

月を見てかき立てられた恋情をいっそうかき立てるものは、大空を鳴いて渡っていく雁である。大空を「鳴き渡る」雁に、恋しさに「泣き渡る」(泣き続ける) 自分を重ねた歌である。

当該歌は、「月」と「雁」とをともに詠んでいる。その組み合わせは、『古今集』秋上に並んで収められている二首の歌、「白雲にはねうちかはしとぶかりのかずさへ見ゆる秋のよの月」(二九一・よみ人しらず・題しらず)、「さ夜なかと夜はふけぬら

しかりがねのきこゆるそらに月わたる見ゆ」（一九二・よみ人しらず・題しらず）に見られる。まずこのような秋の情景が、当該歌の背景として想定されよう。

「月見ればちちに物こそかなしけれわが身ひとつの秋にはあらねど」（古今集・秋上・一九三・大江千里・これさだのみこの家の歌合による）に代表されるように、月は、秋のものの悲しさを誘うものであるが、「君をのみおきふしまちの月見ればうき人しもぞ恋しかりける」（古今六帖・第一・三六三・ありあけ）、「ねざめしてひとり有明の月みればむかしみなれし人ぞ恋しき」（和泉式部集・二五四・まさみちの少将、あり明の月をみておぼしいづるなるべし）といった恋情をかき立てるものとしても詠まれる。

また、「月」と「われて」との組み合わせは、「よひのまにいでていりぬるみか月のわれて物思ふころにもあるかな」（古今集・雑体・一〇五九・よみ人しらず・題しらず）、「いらぬまにこむといひしかばこよひこそわれてをしけれなつのよのつき」（躬恒集・一〇九・なつ）、「三日月のわれては人を思ふともよに二たびは出づるものかは」（古今六帖・第一・三五四・みか月）などの用例に見られる。多くは「三日月」からの連想である。

「鳴きわたる」「かり」は、つとに『万葉集』に、「誰聞きつこゆ鳴き渡る雁がねのつま呼ぶ声のともしくもあるを」（巻八・

一五六六・一五六二・巫部麻蘇娘子が雁がねの歌一首）という、雁が妻を呼んで鳴くと詠んだ例がある。勅撰集においては、『古今集』に、「なきわたるかりの涙やおちつらむ物思ふやどの萩のうへのつゆ」（秋上・二二二・よみ人しらず・題しらず）、「人を思ふ心はかりにあらねどもくもるにのみもなきわたるかな（恋二・五八五・ふかやぶ・題しらず）」といった例が見られる。とくに『古今集』五八五番歌は、鳴き渡る雁に恋する自分を重ねており、その点で当該歌も同様の発想である。

「いとど」「鳴きわたる」「かり」の組み合わせは、『古今六帖』と同時代には、「いとどしく」のかたちで、「とどまらぬはるをしむにいとどしくかへるかりさへなきわたるらん」（中務集・一八・春ををしむまに、かへるかりなく、書陵部本中務集・三九・花をしむ、かへる・「花をしむに」「なきわたるかな」という、春の帰雁を詠んだ例がある。

四四〇〇（うぐひす）

【本文】

はるながらこころもゆかぬうぐひすはなをみながらねのみぞ鳴く

【校異】 ○うぐひすはーうぐひすのは

【語釈】 ○こころもゆかぬ 「心行く」は、念願が叶って心が晴

れ晴れする。○うぐひす 春の到来を告げる鳥。「春告げ鳥」の異名をもつ。「憂く」を響かせる。○はな 梅の花。○みながら 「皆がら」(ことごとく。残らず。すべて)と「見ながら」とを掛ける。

【通釈】春なのに、心が晴れない鶯は、梅の花を残らず見ながら、ひたすら声を上げて鳴いている。

【他出】なし

【考察】

鶯が梅の花の咲く枝をさかんに飛びまわって「鳴く」情景を、時季を得ても心が晴れずに「泣く」と捉えた歌である。発想の根底には、「心から花のしづくにそほちつづくひずとのみ鳥のなくらむ」(古今集・物名・四二二・藤原としゆきの朝臣・うぐひす)がある。

「はるながら」(春であるのに)という句は、「桜ちる花の所は春ながら雪ぞふりつつきえがてにする」(古今集・春下・七五・そうく法師・雲林院にてさくらの花のちりけるを見てよめる)、「ちる花をとづるかすみははるながらにしの山べもみぢすらしも」(斎宮女御集・二五〇・やよひばかりに、あめふる日、かつらのみぢち人のもてまぬれり／御かへり)などがあるが、「年のうちはみな春ながらはてななむ花を見てだに心やるべく」(寛平御時后宮歌合・一四・右)のように、「春のままで」の意の用

例の方が多い。

当該歌では、鶯が花を見ながらも心が晴れないでいると詠むが、『万葉集』には、「我がやどに 花そ咲きたる そを見れど心も行かず……」(巻三・四六九・四六六)という長歌がある。亡き妻を偲ぶ家持の歌であるが、通常、花を見ると心が晴れるとあるところを、それでも心がふさいだままであるという詠歌の視点を、両者で共通していよう。

「……をみながら」という句は、『新編国歌大観』を検するかぎり、当該歌がごく初期の例と見られる。「山ざくらえだきる風の名残なく花をみながら我が物にする」(夫木抄・一四五七・西行上人・家集、風前落花といふ事を)、「ちりのこる花をみながら夏衣心をかへて風をまつらん」(宝治百首・八二〇・蓮性・夏十首)、「さきそむる一もとゆゑに山のはの雲をみながら花かとぞみる」(新統古今集・春上・一一四・前大僧正義連・百首歌たてまつりし時、初花)などの例があるが、いずれも後世の歌である。

鳥について「ねをのみぞ鳴く」と詠んだ歌には、「あしひきの山郭公をりはへてたれかまさるとねをのみぞなく」(古今集・夏・一五〇・よみ人しらず・題しらず)をはじめとする時鳥の他、葦田鶴、山鳥などの用例があるが、鶯の例は意外と少なく、「やまざともうき世のなかをはなれねばたにのうぐひすねをの

みぞなく」(金葉集二度本・雜上・五一七・撰政左大臣・山家鶯といへることをよめる)、「ふかくさの谷のうぐひす春ことにあはれむかしと音をのみぞなく」(金槐和歌集〈実朝〉・春・一三・鶯)など、「谷の鶯」という語句で人事と重ねる後世の歌が散見される。

四四〇四(うぐひす)

【本文】

わがやどにきゐるうぐひすはねよわみはとはぬはつらき物にぞ有りける

【校異】○はねよはみ羽を(本)よはみ(宮)羽をよわみ(黒)羽をよは

み(寛)

【語釈】○きゐる 来てそこにじっとしている。来て止まっている。○はねよわみ 羽が弱いので。鶯の不安定な飛び方を、羽の飛ぶ力が弱いと見た表現か。「……を……み」はミ語法。原因・理由を表す。第三句まで「とはぬ」を導く序詞。○とはぬ 「飛ばぬ」に「訪はぬ」を掛ける。

【通釈】私の家の庭に来てじっと止まっている鶯が、羽が弱いので、飛ばずに、私のもとを訪ねないのは、恨めしいものであったなあ。

【他出】なし

【考察】

春になり、庭まで飛んできた鶯が、なかなか近くまで寄って来ないという情景を序として、近くまでやって来ながらもなかなか訪れない人を待つもどかしさを詠んだ歌である。

「わがやど」と「うぐひす」との組み合わせは、つとに『万葉集』に、「我がやどの梅の下枝に遊びつつうぐひす鳴くも散らまく惜しみ」(巻五・八四六・八四二)、「あらたまの年行き帰り春立たばまづ我がやどにうぐひすは鳴け」(巻二十・四五二四・四四九〇)という用例がある。また、平安中期には、「うぐひすのなくねだにせぬわがやどはかすみぞ立ちてはるとつけつる」(清正集・三・正月やまでらにこもりたりけるに、京より、いかにうぐひすのこゑはききたりや、といへりけるかへりごとに)、「わがやどのこずゑをたかみあさぼらけなくうぐひすのこゑほのかなり」(忠見集・六二・麗景殿の歌合に、ひだりがたにて／うぐひす)、「わがやどにうぐひすいたくなくなるはにはもはだらに花やちるらん」(内裏歌合〈天徳四年〉・四・兼盛・二番 右)、「わがやどの梅がえになくうぐひすは風のたよりにかをやとめこし」(内裏歌合〈天徳四年〉・五・朝忠・三番 左勝)、「あをやぎのいとよりはへてうぐひすはきつつなかなむわがやどにのみ」(尊経閣本元輔集・六二・やなぎ)、「わがやどのやなぎのいとほそくともくるうぐひすのたえずもあるか

な」(道綱母集・一四・うぐひすやなぎのえだにあり、といふだいを)といった例が集中して見出される。

「きゐる」「うぐひす」の例は、『万葉集』には見られず、勅撰集においては『古今集』に「梅がえにきゐるうぐひすはるかけでなけどもいまだ雪はふりつつ」(春上・五・よみ人しらず・題しらず)とある歌が初出であり、かつ、八代集中、唯一の用例と見られる。平安期の例としては、他に、「あをやぎのいとほるめきてなりにけりきゐるうぐひすよりよりになく」(高遠集・三三二・二月)、「植ゑて見し花のあるじもなき宿に知らず顔にて来ゐるうぐひす」(源氏物語・幻・五六七・光源氏)などがある。

「うぐひす」の「はね」に着目した歌には、「梅が枝に鳴きてうつろふうぐひすの羽白たへに沫雪ぞ降る」(万葉集・卷十・一八四四・一八四〇)があるが、羽の色を詠んでおり、当該歌とは一線を画す。一方、「みやまより鳴きていづらん鶯はまづわがやどにはねやすめなん」(嘉言集・三五・うぐひす)は、「わがやど」に羽を休める「鶯」の姿が、当該歌の情景に一脉通じるものがある。

下句「とはぬはつらき物にぞ有りける」と全く一致する句としては、『後撰集』に、「わすれねといひしにかなふ君なれどとはぬはつらき物にぞ有りける」(後撰集・恋五・九二八・本院の

くら・あさよりの朝臣、年ごろせうそこかよはし侍りける女のもとより、ようなし今は思ひわすれねとばかり申してひさしうなりにければ、こと女にいひつきてせうそこもせずなりにければ)という歌がある。また、『古今六帖』には、当該歌の他に、「こともつきほどはなれどかたときもとはぬはつらきものにざりける」(第五・二八八七・おどろかす)という例を見出す。いずれも恋歌である。

四四一一(うぐひす)

【本文】

むらむらのこづたふはるになりぬらし山のまにまにうぐひすなくも

【校異】 ○うぐひすなくも―鶯なく也も(松)

【語釈】 ○むらむらの「はる」を修飾すると見た。「むらむら」は、あちこちに群がっているさまをいう。また、「村村」を掛ける。○こづたふ 木から木へ、枝から枝へと移り渡る。○なりぬらし「ぬらし」は、完了の助動詞「ぬ」の終止形に推定の助動詞「らし」がついたもの。(確かに)……てしまったらしい。……しまっているようだ。○山のまにまに 山の様子に任せてどこにでも。

【通釈】 あちこちの村村に群がる、木々を移り渡る春になったよ

うだ。山のどこにでも鶯が鳴いているよ。

【他出】なし

【考察】

「むらむらのこづたふはる」という表現は、意が解しにくいのが、春の到来とともに、鶯が村村のあちこちに群がり、木々の枝を移り渡る情景を指すと見た。当該歌の主題「鶯」を上句に詠み込まず、山の至るところで鶯の声を聞くようになったことを提示する下句で主題を明らかにし、山に鳴く鶯の声を聞いた詠者が、麓の村村でも鶯が鳴く春になったに違いないと推量した歌であろう。情景としては、「冬ごもり春さり来ればあしひきの山にも野にもうぐひす鳴くも」（万葉集・巻十・一八二八・一八二四）という歌に重なってこよう。

「むらむらの」という句の例は少ない。しかも、「むらむらのにしきとぞみるさほやまのははそのもみぢきりたたぬまは」（和漢朗詠集・上・三〇六・清正・紅葉）のように、錦にちなんので、布を数えるときの助数詞「むら（匹・疋）」との掛詞として用いられる例しか管見に入らず、当該歌の用法とは一線を画す。

「山のまにまに」の例は、勅撰集では、「葦引の山のまにまにかくれなむうき世中はあるかひもなし」（古今集・雑下・九五三・よみ人しらず・題しらず）が初出であるが、すべての勅撰集を参看しても、他には、「あしびきのやまのまにまにたふれたるか

らきはひとりふせるなりけり」（金葉集二度本・恋下・四九二・題読人不知）の一首が見出されるのみである。平安期の私家集にも見当たらず、『新編国歌大観』を検するかぎり、当該歌とこれら二首の歌が、平安期の用例のすべてと言えそうである。

「うぐひすなくも」という句は、『万葉集』に集中して見られる。前掲の一八二八（一八二四）番の他、「うち霧らし雪は降りつつしかすがに我家の園にうぐひす鳴くも」（巻八・一四四五・一四四一）といった用例がある。

四四二（ほととぎす）

【本文】

わぎもこをうらまちかねつほととぎす（む）いたくなきそね（む）こひやま  
んやと

【校異】○わぎもこを―我せこを（黒）我背子を（寛）○うら  
まちかねて―うらまちかねつ（永・林）うら待かねつ（松・和・  
羅・宮・田・黒・寛）○いたくなきかね―いたくなきかね（そ）（宮）  
いたくなきそね（黒・寛）○こひやまんと―こひもやむやと  
（永・松・和・羅・林・宮・寛）恋もやむやと（田・黒）

【語釈】○うらまちかねつ「うらまつ」は、心待ちに待つ意。  
「つ」は完了。○ほととぎす 夏の到来を告げる鳥であるが、  
ここでは夜に鳴く鳥として詠まれる。○なきそね 底本「な

きかね」を校訂。「そね」は、禁止表現に用いられる終助詞「そ」に詠えの終助詞「ね」が付いたもの。○こひやまんやと「恋止む」は、恋心が醒める、恋の苦しみが消えるの意。「や」は疑問。

【通釈】私のいとしい妻を、心待ちに待ちかねた。時鳥よ、ひどく鳴かないでくれ。恋の苦しみが消えるかもしれないと思つて。

【他出】なし

【考察】

妻を待ちかねて寝ることもできず、悶々としている男性の耳に、時鳥のたいそう鳴く声が聞こえてくる。恋心が醒めるかとはばかりに時鳥は鳴くが、男性の恋心はますます募っていく。そこで、時鳥に対し、そんなに鳴かないでほしいと呼び掛けた男性の歌であろう。「ほととぎすいたくな鳴きそひとり居て眠の寝らえぬに聞けば苦しも」(万葉集・巻八・一四八八・一四八四・大伴坂上郎女の歌一首)と同様の発想で、作者を男性に置き換えた歌と見た。

「わぎもこ」を「まつ」という歌は、『万葉集』に、「梅の花咲きて散りなば我妹子を来むか来じかと我が松の木ぞ」(巻十・一九二六・一九二二・松に寄する)という例がある。男性が女性を待つことは上代にはあり得るが、平安期に入ると、もつぱ

ら女性が男性の訪れを待つという通い婚の風習となる。『古今六帖』諸本のうち、黒川本や寛文版本が、本文を「わがせこ」とするのは、この平安期の風習に則った改変であろう。

だが、当該歌は、全体として万葉風の表現が用いられている。「うらまつ」という語も、『古今六帖』の先行例としては、『万葉集』に載る「秋風に今か今かと紐解きてうら待ち居るに月傾きぬ」(巻二十・四三三五・四三一・七夕歌八首)を見出すのみである。

また、「ほととぎす」「いたく」鳴くな、と詠んだ歌も、つとに『万葉集』から見られ、前掲の坂上郎女の歌(巻八・一四八八・一四八四)の他、「ほととぎすいたくな鳴きそ汝が声を五月の玉にあへ貫くまでに」(巻八・一四六九・一四六五・藤原夫人の歌一首)といった例が見出される。とくに坂上郎女の歌は、『拾遺抄』雑上・四〇三番や『拾遺集』夏・一二〇番に採られた。これが八代集中、唯一の用例である。

さらに、「こひやむ」という語も、万葉歌に集中して用いられ、「いかにして恋止むものぞ天地の神を祈れど我や思ひ増す」(巻十三・三三二〇・三三三〇六)、「ぬばたまの夢にはもとな相見れど直にあらねば恋止まずけり」(巻十七・四〇〇四・三九八〇)などの例が見える。なお、八代集においては、「いつとてかわがこひやまむちはやぶるあさまのたけのけぶりたゆとも」(拾遺

集・恋一・六五六・よみ人しらず・題しらず)の一首を見出すのみである。平安期成立の私家集では、『赤人集』の「はるがすみたちにし日よりけふまでにわがこひやまずひとのしげきに」(一九一・かすみによす)があるが、この歌は結句に本文異同はあるものの、『万葉集』巻十・一九一四(一九一〇)番と見られる。

そうすると、前述の黒川本・寛文版本の「わがせこ」本文は、当該歌の本来の姿を推測するに、やはり過剰な校訂本文といえようか。

四四一三(ほととぎす)

【本文】  
我がごとくきみにこふるはほととぎすこのよすがらにいねがてにする

【校異】○きみにこふるは―君をこふるは(和)きみをこふるは(宮)君にこふるや(黒・寛) ○いねかてにする―いねかてにすな(松)

【語釈】○よすがら 夜の間ずっと。夜通し。一晚中。 ○いねがてにする 寝ることができないでいる。

【通釈】私と同じように、あなたを恋い慕うのは時鳥だよ。この夜中じゅうずっと寝られないでいる。

【他出】なし

【考察】

時鳥も私と同様にあなたを恋い慕っているとして、一晚中鳴いて(泣いて)寝られずにいるという共通点を挙げることで、相手に恋心を訴えた歌である。「あしひきの山郭公わがごとくや君にこひつといねがてにする」(古今集・恋一・四九九・読人しらず・題しらず)に発想や語句が酷似する。

「我がごとく」という句は、つとに『万葉集』から見られ、「湯の原に鳴く葦田鶴は我がごとく妹に恋ふれや時わかず鳴く」(巻六・九六六・九六一・帥大伴卿、次田の温泉に宿りて鶴が音を聞きて作る歌一首)、「つとに行く雁の鳴く音は我がごとく物思へかも声の悲しき」(巻十・二二四一・二二三七)のように、葦田鶴や雁を引き合いに出して詠まれることもあるが、「我が後に生まれむ人は我がごとく恋する道にあひこすなゆめ」(万葉集・巻十一・二三七九・二三七五)といった歌もある。八代集において、三代集に集中して見られる。『古今集』には、「相坂のゆふつけどりもわがごとく人やこひしきねのみなくらむ」(恋一・五三六・読人しらず・題しらず)、「わがごとく物やかなしき郭公時ぞともなくよただなくらむ」(恋二・五七八・としゆきの朝臣・題しらず)、「わがごとく我をおもはむ人もがなさてもやうきと世を心みむ」(恋五・七五〇・凡河内みつね・題しらす)

ず)の三首が見え、いずれも恋部の歌である。一方、『後撰集』では、「わがごとく物やかなしききりぎりす草のやどりにこゑたえずなく」(秋上・二五八・つらゆき・題しらず)、「わがごとく物思ひけらしらつゆのよをいたづらにおきあかしつつ」(秋下・四二四・よみ人しらず・題しらず)、「いつしかと山の桜もわがごとく年のこなたにはるをまつらん」(冬・四九八・よみ人しらず・題しらず)は秋・冬部にあり、「わがごとくあひ思ふ人のなき時は深き心もかひなかりけり」(恋一・五二一・よみ人しらず・題しらず)のみ恋歌である。『拾遺集』になると、「ももはがきはねかくしきもわがごとく朝わびしきかずはまさらじ」(恋二・七二四・つらゆき・題しらず)、「わがごとく物思ふ人はいにしへも今ゆくすゑもあらじとぞ思ふ」(恋五・九六五・よみ人しらず・題しらず)の二首はいずれも恋部にある。中でも『古今集』五七八番歌は、当該歌と同じく時鳥を詠んでおり、初句と第三句が全く一致する。

「きみにこふ」は万葉表現である。『万葉集』には、「こほろぎの我が床の辺に鳴きつつもとな起き居つつ君に恋ふるに寝ねかてなく」(巻十・二三一・四・二二二〇)、「我が心焼くも我なりはしきやし君に恋ふるも我が心から」(巻十三・三二八五・三二七二)、「……ひとり居て 君に恋ふるに 音のみし泣かゆ」(巻十三・三三五八・三三四四)、「出で立たむ力をなみと隠り居

て君に恋ふるに心利もなし」(巻十七・三九九四・三九七二)といった用例が見出される。

また、「このよすがらに」という表現も、先行例は唯一、『万葉集』に、「……憊はせる 君が心を うるはしみ この夜すがらに 眠も寝ずに 今日もしめらに 恋ひつつそ居る」(巻十七・三九九一・三九六九)という長歌にある。

結句「いねがてにする」は、前掲『古今集』四九九番歌をはじめとして、やはり『万葉集』に、「夕されば君来まさむと待ちし夜のなごりそ今も寝ねかてにする」(巻十一・二五九三・二五八八)があり、『古今集』には他にも、「あきはぎのしたば色づく今よりやひとりある人のいねがてにする」(秋上・二二二〇・よみ人しらず・題しらず)という歌が存する。平安中期までの例としては、「秋の月いかなる物ぞ我がこころ何ともなきにいねがてにする」(小町集・一一・山里にて、秋の月を/また)、「わがごとくやいねがてにする山だもかりてふこゑにめをさましつつ」(相模集・五四九・秋)といった歌があるが、用例数としては少ない。なお、この『相模集』歌は、初句と第二句の表現が当該歌に近いが、「古にありけむ人も我がごとく妹に恋ひつつ寝ねかてずけむ」(万葉集・巻四・五〇〇・四九七)や前掲『古今集』四九九番などの表現をも念頭に置いた詠であろう。

四四二九（ほととぎす）

【本文】

むかしより鳴きふるしつつほととぎすいくその夏をここゑにたつらん

【校異】○いくその夏をここゑにたつらん—いくその夏をこ聲をにたつらん（黒・寛）

【語釈】○鳴きふるしつ「鳴き旧す」は、何度も鳴いてその声の耳新しさをなくす意。○いくその夏 どれくらい多くの夏。「いくそ」は多くの数量。多くは助詞「の」が付いて体言に続く。○こゑにたつ 声に出す。

【通釈】昔から何度も鳴いて耳新しさをなくしながら、時鳥よ、いったい幾度の夏を過こし、声に出して鳴いているのだろうか。

【他出】なし

【考察】

「こぞの夏なきふるしてし郭公それかあらぬかこゑのかはらぬ」（古今集・夏・一五九・よみ人しらず・題しらず）を踏まえ、毎年夏が来ると聞き慣れた声で鳴く時鳥は、いったいいつからこのように鳴いているのだろうか、現在の夏の情景からこれまでどの時の流れに思いを馳せた歌である。

「ほととぎす」が「むかし」から同じように鳴くという歌は、「いそのかみふるき宮この郭公声ばかりこそむかしなりけれ」

（古今集・夏・一四四・ならのいそのかみでらにて郭公のなくよめる）の他、「ふるさとはみしこともあらずほととぎすなくねをきくぞむかしなりける」（書陵部藏御所本躬恒集・三七六）、「としこごとにめづらしけれどほととぎすむかしのここゑもかはらざりけり」（道濟集・六九）などの例がある。

「ほととぎす」が「鳴きふるす」という歌は、前掲の『古今集』一五九番の他、平安期には、「なきふるすさとやありけんほととぎすわが身ならぬをいかごたへん」（平中物語・第十二段・六三・男）という歌が見出される。

「いくその夏」の例は、『新編国歌大観』を検するかぎり、他に「すくもやくみほのうら人ふななれていくそのなつをこがれきぬらん」（好忠集・一二二・四月をはり）を見出すのみである。ただし、「いくその春」「いくその秋」の例ならば、「よろづよのをじほの山のこまつばらいくその春ををしみつへむ」（尊経閣本は元輔集・四一・をしきのおもてに、あしでにて）、「ゆきかへりたびにとしふるかりがねはいくそのはるをそらにみるらん」（道信集・六七・かへるかり）、「ふたばよりわがなでしこをあはれなるいくそのあきにあはんとすらん」（西本願寺本忠岑集・一〇八）などの歌がある。「いくその」という語句は、推量の助動詞を伴って、巡ってきた季節の情景に過去や未来を重ねて思いを馳せる表現の型と見られよう。

「ほととぎす」が「こゑにたつ」という例は、『古今六帖』の  
 出典未詳歌にもう一例、「ほととぎすこゑにたててもとしへぬる  
 わがものおもひをしらぬ人きけ」（第五・二五五二・びはの大  
 臣・としへていふ）があるが、「何ゆゑにしのおなるらんほと  
 ぎすこゑにたてぬはくるしきものを」（秋風集・夏・一五一・花  
 山院のおほみうた・だいしらず）の他は、「わればかりよをばな  
 げかじ郭公声にたてては鳴きわたらん」（人家集・六二・百首  
 歌中に）、「うちそへて我もこゑにやたててまし山時鳥なきわた  
 るなり」（風葉集・雜一・一一八四・ひちぬいしまの閑白・だい  
 しらず）など、後世の例である。用例数としてもそれほど多く  
 はない。

四四五三（ほととぎす）

【本文】

うちとけていもねられねばほととぎすよぶかきこゑは我のみぞ  
 聞く。

【校異】 ○いもねられねは—いもねられは（林）

【語釈】 ○うちとけて 緊張を解いて。心をゆったりとして。心  
 を落ち着けて。 ○いもねられねば 「いも寝られず」は、眠り  
 もできない、熟睡もできない意。「られ」は possible の助動詞「ら  
 る」の未然形。「ねば」は、打消の助動詞「ず」の已然形「ね

に接続助詞「ば」が付いて確定条件を表す。……ので。○ほ  
 ととぎすよぶかきこゑ 時鳥が深夜に鳴く声。「よぶかし」は、  
 夜の気配の濃い、夜更けの状態をさす。とくに、夜明けまでに  
 まだ間がある頃をいう。

【通釈】 ゆったりと寝ることもできないので、時鳥よ、深夜に鳴  
 く声は、私だけが聞くことだ。

【他出】 なし

【考察】

ぐつすりとも寝ることができないまま、時鳥の夜深く鳴く声を  
 自分一人で聞くことになった孤独を詠んだ歌である。眠れない  
 原因は明示されないが、あるいは恋の悩みか。

「うちとけて」寝られないということは、「打ちとけていをだ  
 にねねばあふことのゆめぢをさへぞへだてはてつる」（元真集・  
 九九）、「たなばたのくものころものうちとけてぬるほどもなく  
 あくるあまのと」（惟成弁集・二八・うちの御うたあはせ／たな  
 ばた）といった歌に詠まれる。その裏返しとして、恋の相手は  
 「うちとけて」眠っているだろうという歌も、「うちとけてきみ  
 はねぬらん我はしも露とおきゐておもひあかしつ」（平中物語・  
 第九段・五四・男、大和物語・第四十六段・六二・平中・「君は  
 ねつらむ」「つゆのおきゐてこひにあかしつ」という例がある。  
 「ほととぎす」が「よぶか」く鳴く声を詠んだ歌は、『万葉集』

にはないが、平安期に入ると、「五月雨に物思ひをれば郭公夜ぶかくなきていづちゆくらむ」（古今集・夏・一五三・紀とも）り・寛平御時きさいの宮の歌合のうた、「ふた声と聞くとはなしに郭公夜深くめをもさましつるかな」（後撰集・夏・一七二・伊勢・夏の夜、しばし物がたりしてかへりにける人のもとに、又のあしたつかはしける）をはじめ、数多い。万葉歌人の私家集にも、『家持集』に二首、「さみだれはそらもとどろにほととぎすよふかくなきついやねかねつる」（六四・夏歌）、「わがやどのはなたちばなにほととぎすよふかくなけばこひまさるなり」（八八・夏歌）といった歌があるが、やはり平安期の詠と見るのが妥当であろう。

時鳥の声を「我のみぞ聞く」という歌は、「やまがつと人はいへどもほととぎすまづはつこゑはわれのみぞきく」（是則集・九・夏 ほととぎす）、「山里に家居せしよりほととぎすよのはつねは我のみぞきく」（兼盛集・一九六・うちの御屏風／四月山里にてほととぎすきく）といった平安中期までの例があり、後世においても、「ほととぎすまだうちとけぬしのびねはこぬ人をまつ我のみぞきく」（新古今集・夏・一九八・白河院御歌・待客聞郭公といへる心を）、「山ちかく家みしせば郭公なくはつこゑをわれのみぞきく」（金槐和歌集〈実朝〉・一四三・山家郭公）などの歌が散見される。

#### 附記

本稿は、「古典籍の保存・継承のための画像・テキストデータベースの構築と日本文化の歴史的研究」（同志社大学人文科学研究所第19期研究会第4研究、および科学研究費助成事業基盤研究（C）課題番号16K00469、二〇一六～二〇一八年度）の一部である。

用例収集に際し、『新編国歌大観』CD-ROM版 Ver.2とともに、竹田正幸氏（九州大学大学院システム情報科学研究院）作成の文字列解析器 e-CSA Ver.200 を使用した。

最後に、資料を御提供くださった宮内庁書陵部・肥前島原松平文庫・国文学研究資料館に厚く御礼申し上げます。

『古今和歌六帖』別出歌一覧―第六帖、4355〜4453番―

- 4355 かり  
いとはやも鳴きぬる雁かしらつゆに色どる木木も紅葉あへぬに  
1-1 古今209 「白露の」「もみぢあへなくに」
- 4356 春がすみかすみでいにしかりがねはいまぞ鳴くなる秋霧のうへ  
に(人丸三首)
- 4357 1-1 古今210、2-3 新撰和36、3-20 公忠12  
あやしくもきなかぬかりかしら露のおきにしあさほひさしきも  
のを  
(未詳)
- 4358 蘆辺なるをぎのはそよぎ秋風のふきくるなへに雁鳴きわたる  
2-1 万葉2138 「をぎのはさやぎ」、6-5 麗花集55 「をぎのはそ  
よぐ」「かりぞなくなる」、3-1 人丸110 「かきねなる」「萩の花  
さく」「ふくなるなへに」
- 4359 秋かぜにこゑをほにあげてくるふねはあまの戸わたるかりにぎ  
りける(みつね)
- 4360 1-1 古今212、2-2 新撰万117、5-4 寛平后110 「行く舟は」  
ひさかたのあまぐもおかずくもがくれ鳴きぞ行くなるはつた雁  
がね(やかもち)
- 4361 2-1 万葉1570 「あままもおかず」「くもがくり」「わさだかりが  
ね」  
ことしげきさにすまはけさなきし雁にたくひていなましも  
のを  
3-1 人丸33、2-1 万葉1519 「ゆかましものを」
- 4362 かりがねのたかく名のりしみなれども秋のこゑとぞ人はいひて  
し  
(未詳)
- 4363 秋のやまきりたち分けてくるかりのちよにかはらず声きこゆな  
り(つらゆき四首)
- 4364 1-2 後撰357 「あき風に」「霧とびわけて」「千世にかはらぬ」  
ともどもとおもひきつれどかりがねはおなじ里へもかへらざり  
けり
- 4365 3-19 貫之114  
物おもふと月日の行くもしらざりつ雁こそ鳴きてあきと分けつ  
れ
- 4366 1-2 後撰358 「秋とつげつれ」  
ことづけてとふべきものはつかりの聞ゆる声ははるかなりけ  
り
- 4367 3-19 貫之387 「ことづても」
- 4368 はつかりの鳴きこそわたれ世の中の人の心の秋しうければ  
1-1 古今804、3-19 貫之623
- 4369 はるがすみとびわけいぬるこゑききてかりきぬなりとほかはい  
ふらん
- 4370 3-19 貫之503  
年ごとにくもちまどはしくるかりはむづからや秋をしるらん  
(みつね五首)
- 4370 1-2 後撰365 「雲ちまどはぬ」「かりがねは」、7-5 躬恒283 「雲  
ちまどはず」「かりがねは」  
天の原かりぞとわたるとほやまのこずゑはむべぞいろづきにけ



- 4391 4390 4389 4388 4387 4386 4385 4384 4383
- うぐひす  
うちなびきはるさりくればささのはにをはうちふれて鶯ぞ鳴く  
2-1万葉1834 「うちなびく」 「しののうれに」 「うぐひすなくも」  
くだらののはぎのふる枝にはるまつとすみし鶯鳴きにけんかも  
(あかひと二首)  
2-1万葉1435 「をりしうぐひす」  
4385 梅のはなさけるをかべにいへしあればともしくもあらず鶯のこ  
ゑ  
2-1万葉1824 「いへをれば」  
4386 打ちなびき春さりくれば青柳のえだくひもちてうぐひすなくも  
2-1万葉1825 「はるかすみ」 「ながるるなへに」, 2-1万葉1834  
「うちなびく」 「しののうれに」 「をはうちふれて」  
4387 うちきえし雪はふりつつしかすがに我が家のそのに鶯なきつ  
2-1万葉1445 「うちきらし」 「うぐひすなくも」, 1-2後撰33  
「かきくらし」 「鶯ぞなく」, 1-3拾遺集11 「うちきらし」 「鶯  
ぞなく」  
4388 はるの日にかすみたなびきうらがなしこの夕かげに鶯なくも  
2-1万葉4314 「はるののに」  
4389 鶯のたにのそこにて鳴くこゑはみねにこたふるやまびこもなし  
(みつね三首)  
7-5躬恒15, 3-12躬恒361 「なくこゑを」  
4390 吹くかぜをなきてうらみよ鶯はわれや花に手だにふれたる  
1-1古今106  
しるしなき音をも鳴くかな鶯はことしのみちる花ならなくに  
1-1古今110 「うぐひすの」, 3-12躬恒375 「うぐひすの」, 7
- 4397 4396 4395 4394 4393 4392
- 1-5躬恒26 「黄鳥の」  
まつ人はこぬものゆゑにうぐひすの鳴きつるえだををりてける  
かな(そせい二首)  
1-1古今100 「まつ人も」 「なきつる花を」  
4393 はるたてば花とや見えんしら雪のかかれる枝に鶯のなく  
1-1古今6 「花とや見らむ」 「うぐひすぞなく」, 3-9素性  
1 「はなとやみらむ」 「うぐひすぞなく」, 2-2新撰万41 「は  
るくれば」 「はなとやみらむ」  
4394 花のかを風のたよりにたくへてぞうぐひすさそふしるべにはす  
る(どものり)  
1-1古今13 「しるべにはやる」, 2-3新撰和15 「しるべには  
やる」, 3-11友則2 「しるべにはやる」, 5-4寛平后1 「し  
るべにはやる」, 2-2新撰万11 「まじへてぞ」 「しるべにはや  
る」  
4395 たのまれぬ花の心とおもへばやちらぬさきよりうぐひすの鳴く  
(おきかせ)  
3-10興風68, 5-10亭子合10, 6-5麗花集12 「うぐひすの  
□く」  
4396 うぐひすの谷よりいづるこゑなくははるくることをたれかつげ  
まし(千さと)  
5-4寛平后22, 1-1古今14 「たれかしらまし」, 2-2新撰  
万261 「はるはくるとも」  
4397 梅のはなちるてふなへにはるさめのふりてつつなく鶯のこゑ  
(はつせを)  
1-2後撰40, 3-15伊勢集336

- 4406 4405 4404 4403 4402 4401 4400 4399 4398
- はるさればまづ鳴く鳥の鶯のことさきだてて君をしまたん  
 体15
- 雪のうちはるはきにけりうぐひすのこほれる涙いまやとくら  
 ん(二条のきさき)
- わがやどにきゐるうぐひすはねよわみとはぬはつらき物にぞ有  
 りける
- 梅が枝にきゐる鶯はるかけて鳴けどもいまだ雪はふりつつ  
 1-1古今5、2-3新撰和19、5-264和十種41、5-265和十  
 体17
- むめのはなみにこそきつれ鶯のくくといとひしもおる  
 1-1古今1011
- うぐひすの鳴きつる声にさそはれてはなの本にぞ我はきにける  
 1-2後撰35、3-2赤人4、3-40千里2
- はるながらこころもゆかぬうぐひすははなをみながらねをのみ  
 ぞ鳴く
- たけちかくよどこねはせし鶯の鳴くこゑ聞けばあさいせられず  
 (これひら)
- うぐひすのおのがは風にちる花をたれにおほせてこころ鳴くら  
 ん
- 1-1古今109「こづたへば」、3-9素性15「こづたへば」「た  
 れによそへて」

- 4413 4412 4411 4410 4409 4408 4407
- 我がごとくきみにこふるはほととぎすこのよすがらにいねがて  
 にする
- わぎもこをうらまちなつほととぎすいたくなきかねこひもや  
 むやと
- 村村のこづたふはるになりぬらし山のまにまにうぐひすなくも
- ほととぎす
- 2-1万葉1939「ことさきだちし」、3-2赤人215「はるくれば」  
 「まづなくをりの」「ことさきだちし」「はなをしまたん」
- はるなればつまをもとむるうぐひすの梢をつたひ鳴きわたるか  
 な
- 2-1万葉1830「はるされば」「つまをもとむと」「こぬれをつた  
 ひ」「なきつつもととな」、3-2赤人130「つまやもとむる」「なき  
 つつはふる」
- 冬がくれ春さりくればあしひきの山にも野にもうぐひすなくも
- 2-1万葉1828「ふゆこもり」、3-2赤人129「ふゆこもり」「は  
 るはたちきに」「うぐひすなきつ」
- みそのふの竹のはやしにうぐひすはしばなかましを雪はふりつ  
 つ
- 2-1万葉4310「しばなきにしを」
- うぐひすのこゑのほのかにきこゆるはいづらのやまになく山び  
 こそ
- 5-417平中28「こゑのはつかに」「いづれの山に」

- 4414 (未詳)  
 ほととぎすこゑきくをのの秋風にあさぢさけれやおとのともし  
 き(おばたのひろせ)
- 4415 2-1万葉1472 「はぎさきぬれや」「こゑのともしき」  
 もののふのいはせのもりの時鳥今もなかねか山のこかげに
- 4416 2-1万葉1474 「やまのとかげに」  
 時鳥さなきとよますうのはなとともによこしとはましものを
- 4417 2-1万葉1476 「さなきとよもす」「うのはなの」  
 橘のはなちるさとのほととぎすかたらひしつづ鳴く日しぞおほ  
 き(大伴大納言)
- 4418 2-1万葉1477 「かたこひしつづ」  
 我がやどに月おしてれりほととぎす心ありこよひさなきとよま  
 せ
- 4419 2-1万葉1484 「こころあれこよひ」「さなきとよもせ」  
 ことしげさきはさまさず時鳥なれだにきなけあさとあくべく  
 (おほとものよなは)
- 4420 2-1万葉1503 「ことしげみ」「あさとひらかむ」  
 かききらし雨ふるよるをほととぎすなきていぬなりあはれその  
 とり
- 4421 2-1万葉1760 「かききらし」「あめのふるよを」「なきてゆくな  
 り」  
 家にいきて何をかたらんあしひきのやまほととぎすひとこゑも  
 がな(くめのくろなは)
- 4422 2-1万葉4227 「ひとこゑもなけ」、1-3拾遺集97「家に来て」、  
 1-3拾遺抄62「いへにきて」、5-268深窓秘28「ひとこゑもな  
 け」
- 4423 2-3新撰和363「花橘に」「香をとめて」、2-6和漢朗174「か  
 き  
 をとめて」  
 もののふのいはせのもりのほととぎすいたくなきそ我がこひ  
 まさる
- 4424 2-1万葉1474 「いまもなかねか」「やまのとかげに」、2-1万  
 葉1423 「かむなびの」「よぶこどり」  
 ほととぎすいたくなきそながこゑをさ月のたまにあひぬるま  
 でに
- 4425 2-1万葉1469 「あへぬくまでに」  
 夏のよのふすかとすればほととぎす鳴くひとこゑにあくるしの  
 のめ
- 4426 1-1古今156、2-2新撰万51、2-6和漢朗155、5-5寛平  
 中9、5-266三十人15、5-267三十六14、6-3継色紙3、2  
 -3新撰和137「なつの夜は」、5-4寛平后46「夏の夜は」  
 此里にいかなる人か家あしてやまほととぎす常に聞くらん  
 3-19貫之441「絶えず聞くらん」、1-3拾遺集107「たえずきく  
 らむ」、1-3拾遺抄68「たえずきくらむ」
- 4427 1-1古今160 「よただなくらむ」  
 さみだれの空もどろに郭公何をうしとかよはになくらん
- 4428 蘆引のやまのこずゑしたかければ鳴くほととぎす声はるかなり
- 4429 5-5寛平中11「夏山の」「みねのこずゑの」「こゑかはるかな」  
 むかしより鳴きふるしつづほととぎすいくその夏をこゑにたつ

- らん  
 〈未詳〉
- 4430 月をだにあかずおもひてぬぬものをほととぎすさへ鳴きわたるかな  
 3-19貫之35「あかずとおもひて」  
 はなもちりほととぎすさへいぬるまできみにもゆかず成りにけるかな（以上七首つらゆき）
- 4431 1-2後撰211、7-7貫之30、3-19貫之899「君にゆかずも」  
 こがくれてさつき待つともほととぎすはねならはしに枝うつりせよ（伊勢三首）
- 4432 1-2後撰159、3-15伊勢集455「五月待つまは」  
 時鳥はつかなる音を聞きそめてあらぬもそれとおもほゆるかな  
 1-2後撰189「おほめかれつつ」、3-15伊勢集454「あらぬにそれと」  
 「おどろかれつつ」
- 4433 さつきこばなきもふりなんほととぎすまだしきほどのこゑをきかばや  
 1-1古今138、3-15伊勢集374、2-3新撰和125「五月には」  
 ふたこゑときくとはなしにほととぎすよぶかくめをもさましてるかな（みつねいせとこそ）
- 4434 1-2後撰172、1-3拾遺集105、3-15伊勢集119、5-26三十人36、5-267三十六36  
 ほととぎす我とはなしにうのはなのうきよの中に鳴きわたるらん（みつね）
- 4435 1-1古今164、6-4如意宝5、7-5躬恒272「うきがまにまに」  
 「音をもなくかな」
- 4436 くるるかとみれば明けぬる夏のよをあかずとやなくやまほととぎす（ただみね）
- 4437 1-1古今157、2-2新撰万57、3-13忠岑22、5-4寛平后73、6-3継色紙4、7-6忠岑12  
 いそのかみふるきみやこの時鳥こゑばかりこそむかしなりけれ（いせ）
- 4438 1-1古今144、2-3新撰和131、3-9素性19  
 ほととぎす鳴くこゑ聞けばあぢきなくぬしさだまらぬこひせらるはた（おなじ）
- 4439 3-9素性18、1-1古今143「はつこゑきけば」  
 よやくらきみちやまどへるほととぎす我がやどにしも過ぎがてに鳴く（とものり）
- 4440 1-1古今154「わがやどをしも」、2-2新撰万75「みちやまよへる」  
 「わがやどをしも」、5-4寛平后65「我が宿をしも」  
 「すががてにする」、3-11友則11「をりはへてなく」
- 4441 さみだれに物おもひをれば時鳥よぶかく鳴きていづち行くらん（おなじ）
- 4442 1-1古今153、2-2新撰万47、3-11友則10、5-4寛平后54  
 おとは山今朝こえければほととぎすこゑをはるかに今ぞ鳴くなる（おなじ）
- 4443 1-1古今142「こずゑはるかに」、3-11友則8「こずゑはるかに」  
 行きやらで山路くらしつほととぎす今ひとこゑのきかまほしさに

- 4449 3-12 躬恒 149、5-1 266 三十人 26 「いもねであかす」、5-1 267 三十六 26 「いもねであかす」
- 4448 2-1 1万葉 1501 「つくはねに」「わがゆけりせば」「やまびことよめ」「なかましやそれ」  
ほととぎすよぶかきこゑは月まつとおきていもねぬ人ぞききける(みつね)
- 4447 1-1 1古今 158 「いりにけむ」、5-1 4 寛平后 56 「入りにけむ」、2-1 2 新撰万 71 「いりにけむ」  
つくばねを我がゆけりとは時鳥やまびことよみなきなましとも
- 4446 1-1 1古今 152 「すみわびぬとよ」、3-1 5 小町 7 「住侘びぬとよ」  
夏やまにこひしき人や入りぬらんこゑふりたてて鳴くほととぎす(きのあきみね)
- 4445 1-1 1古今 578 「よただなくらむ」、3-1 8 敏行 8 「よただなくらん(としゆき)」  
我がごとく物やかなしきほととぎすときぞともなく夜夜に鳴くらん(としゆき)
- 4444 1-1 2 後撰 181 「なきもはてぬに」  
ふすからにまつぞわびしき時鳥なくひとこゑにあくるよなれば(ふかやぶ)
- 4453 うちとけていもねられねばほととぎすよぶかきこゑは我のみぞ聞く  
(未詳)
- 4452 1-1 1古今 137、3-1 4 猿丸 36、2-1 3 新撰和 123 「時鳥」「花たちはなに」  
五月まつ山ほととぎすうちはぶき今もななんこそぞのふるこゑ
- 4451 2-1 1万葉 1951 「ことときよりは」、3-1 2 赤人 227 「きみにあへるとき」「ことときよりは」  
あひがたききみにあへるよ時鳥ことときよりも今こそなかめ
- 4450 1-1 1古今 710 「ただここにしも」、2-1 2 新撰万 81 「ただここにたがさとによがれをしてかほととぎすただここにのみねたるこゑするしも」
- 29 265 和十体 12、5-1 266 三十人 62、5-1 267 三十六 77、5-1 268 深窓秘